青森での泣き別れ

友人H君との付き合いは長い。大学二年生の時からだから、もう三十年を超えている。学生寮の先輩の立場で初めて彼にあったのだが、真面目一本槍の私にとっては、あらゆる面でどちらが先輩であるか分からない人物であった。つまり何も知らない私に遊びを教えてくれたのが彼であったのだ。

酒、麻雀、パチンコと私に取ってはどれも革命的なことばかりであった。お陰さまで今でこそ私も一人前の遊び人になっているが、彼との出会いがなければカチカチの真面目人間になっていたかもしれない。何が幸いするか分からないものである。そんな彼にお礼として私が学問を教えてあげたことは言うまでも無い。

彼との一番の思い出と言えば、北海道旅行である。昭和四十五年の夏、私は学生時代最後の夏休みを迎えていた。思い出作りにと北海道行きを計画したものの、先立つものが全くなく、七月いっぱいはアルバイトで軍資金を稼ぎ出し、八月になって周遊券で全道を回ろうという事になった。そして彼は駅前の菓子店の売り子、私はデパートでバーゲンの売り子として、冴えない仕事であったがとにかく頑張った。一日八百円だったと記憶している。その年の夏は、ことのほか暑くクーラーの効いた所で働こ

うと考えた浅知恵とはいえ、あまりカッコの良い職種ではなかった。　ともあれ、目出度く給料をもらい、北海道一周十四日間通用の切符と諸々の準備を整え、山用のリュックにテント、寝袋と完全装備で高崎駅を出発したが、ここでさっそく問題が起きる事になる。周遊券は上野駅より有効で高崎・上野間は別料金が必要とのこと。熟慮の結果、大切な軍資金を使うまいと不正乗車を企てることとなったわけだ。

キセルそのものは上手く成功したが、とんでもない罰が当たるとは二人とも全く知る由も無かった。上野行きの列車が途中の熊谷あたりまで来た時、突然に空が真っ暗になり、凄まじい夕立となったのだが、今から思えば起こりつつある悲劇を十分に暗示していた。

青森行の急行「八甲田」は八月一日午前零時五分に我々二人を乗せて意気揚々と上野駅を発車した。行きがけの駄賃にと十和田湖に立ち寄る計画であったため、最初の下車駅は翌朝十時着の三戸である。一睡も出来ずに三戸で列車を降り、ふらふらと改札を出た私のすぐ後にH君が続く筈だったが、ここで事件が勃発した。

「ない！ ない！ 切符がない！」と彼、改札の前であらゆるポケットを探している。リュックの中まで探したが結局出てこない。駅員にも協力してもらい青森駅で列車の到着を待って車内を探してみようという事になり、駅舎で二時間ほど待つこととなっ

た。
彼のその間のションボリとした様子は気の毒で、今もって表現する言葉もない。慰めの言葉なぞ更々なかった。
切符は出て来なかった。一か月分のアルバイトの大半をつぎ込んだ切符である。せめてもの救いは駅員の計らいで上野・三戸間の料金は目こぼしして貰った事であった。
その後の彼はどこまでも勇気があった。立ち直りも早かったが、気配りが素晴らしかったのだ。一緒に旅行を中止すべしと考える私に、四年生の夏休みで最後のチャンスだから私一人でも旅行を続けてくれと彼は言ってくれたのだ。友情を感じた一瞬でもあった。
彼とは十和田湖で一泊だけ付き合ってもらい、青函連絡船の桟橋で別れた。その後私は無事一人で北海道一周を終え、学生時代の良き思い出を作ることが出来たが、彼はその後、新婚旅行で北海道へ行くまでは十年間ほど北海道には縁が無かった。三十年を経た現在でも彼とは酒を飲むたび、この話となる事が多い。しかしキセルをした罰が当たったという事は二人とも自分からは絶対に口にしない。